

接続詞として用いられる「なので」の意味機能への再考察
－語用論的観点に基づいて－

A New Approach to the use of NANODE as a conjunction

－ From a viewpoint of Pragmatics －

許 夏玲

東京学芸大学留学生センター

要旨

本研究では日常会話において接続詞として多く用いられている「なので」の意味機能を実の会話データに基づいて、語用論的観点から分析し、また「なので」と似ている表現（「だから/ですから」「ですので」「なんで」など）、接続助詞の「ので」と比較することにより、「なので」の意味機能を明らかにすることを目的としている。考察の結果、文頭の「なので」は丁寧体を用いていないため、畏まった感じにはならないが、「だから」と比べ、一般的事象に基づいてより客観的に判断を根拠とする文脈に用いられることから、客観性を保ち、主張を和らげる効果があると考えられる。しかし、学術的文章やフォーマルな文章では、改まり度の足りない、口頭表現の使用を避け、文章表現の使用を指導するべきである。

キーワード：接続詞、文頭の「なので」、客観性、若者言葉、語用論

接続詞として用いられる「なので」の意味機能への再考察 — 語用論的観点に基づいて —

許 夏玲

東京学芸大学留学生センター

1. 研究背景

日本語の接続詞の多くは動詞から転じてきたもの（「ついで」「要するに」等）、また指示詞（「それに」「こうして」等）、名詞（「実際」「逆に」等）、副詞（「また」「ただし」等）、接続助詞（「だから」「だが」「だのに」等）といった要素によって構成された複合的なものであると言われている（野田他 2002）。順接を表す接続詞として用いられる「だから/ですから」「ですので」があるのなら、「なので」の存在も考えられるが、日常会話において、「なので」を頻繁に耳にするのは、ここ数年のことだと思われる。接続詞としての「なので」は塩田（2008）が、調査の結果、若い世代ほど（10～20代）多く用いられており、年代が高くなるごと（50代以降）に使用率が下がると指摘した。また、水落（2020）は17名の日本語教員に対するアンケート調査で約64～76%の回答者が会話またはメール・LINEなどで接続詞として用いられる「なので」に出会ったことがあるという結果を示している。本来、接続助詞として位置づけられるはずの「ので」が、断定の口語助動詞「だ」の連体形である「な」とともに構成されて文頭に用いられる背景として次のことが考えられる。

1.1 若者言葉の特徴

近年の若者の心理的特徴について、米川（1996）は、若者が他者と深く付き合わず、あまり関わろうとしないし、また自分が傷つけられるのを避けるために、他者に対する批判的なことばを言い換えて柔らかくしていると指摘している。また、許（2014）は若者の日常会話によく用いられた「とか」「なんか」「すごい」「じゃない」「みたいな」を中心に考察し、これらの表現の本来の意味機能と話し言葉における機能の変化を分析した結果、若者言葉として「文や言葉を短縮したもの、いわゆる省略表現」（メールアドレス→メルアド）と「形態的派生」（「すごく→すごい有名になった）」という形態面の特徴を挙げている。更に、意味機能の面からは、「機能の転換」（助詞から転じてフィラーとして用いられる「なんか」）と「曖昧さ」の特徴を挙げている。表現を曖昧にするのは、若者の優しい志向でコミュニケーションを重視し、主張や対立を回避する心理的な側面に起因していると考えられる。同様に、日常会話において、話し手の主観的な判断を表す接続詞「だから」の使用を避け、主張を和らげるために客観的な判断を表す「なので」が選択されるようになったと考えられる。

1.2 接続詞へと転じた品詞の変化

文中にあるはずの接続助詞「ので」が文頭に移動し、接続詞の用法へと転じるのは、決して最近の出来事ではないという。尾谷（2015）では、2004年から2005年にかけて、新聞で「なので」が用いられた記事が3件あると指摘している。また、『問題な日本語』（矢澤 2004）でも「違和感」を感じる人もいる新しい用法とされており、改まった場では「ですから」などを使う方が好ましいと提案されている。

その後、2005年～2019年発行の国語辞典に次々と「なので」の記載が見られ、多くの辞典には接続詞として「口頭表現」「ややくだけた言い方」と記述されていることがわかる（水落 2020）。実は、野田他（2002）の接続詞の分類には、順接を表す「だから」はあるものの、「なので」は取り上げられていない。また、永野（1959）の接続語（接続詞）の分類にも「なので」について触れられていない。このように、接続詞として用いられる「なので」の用法が存在しているとしても、2004年より前には使用率が決して高かったとは思えない。

一方で、ここ数年、テレビのバラエティ番組、広告から日本語教育現場の仕事仲間、学生たち（20代～40代）の会話まで接続詞として「なので」が頻繁に使用されているためか、余計に会話中の「なので」が耳に入ってきて気になる。そこで、「なので」の使用実態を調べようと思ったところ、「なので」に関する先行研究が既にあり、筆者のみが不自然だと思わないのではないことを知って逆に安心した。

2. 研究目的

接続詞として用いられる「なので」の意味機能、成立、容認度などについて、今までの先行研究（尾谷 2015、水落 2020 など）で既に研究がなされており、これらの研究成果が大変参考になった。しかし、多くの先行研究では「なので」に焦点を当てられており、「なので」と似ている表現（「だから/ですから」「ですので」）、また接続助詞としての「ので」との使い分けについてまだ十分に論じられていないと思う。それに加えて、先行研究で示されている用例には「なので」の出現している先行文脈の情報が足りないため、「なので」の性質がまだ十分に明らかになっていないと言える。日常会話においては、一語「雨？」（雨が降っているかという意味）でも発話文になり、その置かれた発話状況で話者の意図している意味を伝達することができる。しかし、我々はいつも一語や一発話文を発することはない。接続詞は文単位を超えて、複数文のまとまり関係を示す役割を持っている。接続詞によって、話者の思考の展開方向もうかがえるのである。

たとえば、次のテレビのバラエティ番組の会話例を見てみよう。

例 (1)

ナレーション： 色を決めたら次は

花の先生： 主役の花を決める (は～) [文中の () の表現はあいづち]
主役の花はある程度存在感のあるお花を選ぶといいです。

ナレーション： 主役は大きさや形に存在感のあるものをチョイス、さらに

先生： そして、そこに小花ですね。主役の花を引き立てるそういう小花
を選んであげるといいです。

ナレーション： 小花を選ぶ主役の花が一層引き立てる

先生： そして、もう一つ、グリーンですね。お花は、葉っぱが絶対
グリーンが付いてますので、お花だけではなくて、グリーンを
入れてあげることで、お花の色もきれいに見えるので

ナレーション： お花だけではなくて、葉物も入れると全体がまとまりそうです。
でも、問題は生け方そのポイントは

先生： お花は自然界で育っているのです、いろんな方向に伸びているんで
すね。(はい) なので、その姿を活かしてあげると、お花がいき
いきとして見えるんです。

[「所さんの目がテン」日テレ, 5/9 放送]

上掲の例においては、接続詞としての「なので」も接続助詞の「ので」も使用されており、話者には偶然に両方の表現を使用したというより、意図的に使い分けをしているように考えられる。

本研究は日常会話において、接続詞として多く用いられている「なので」の意味機能を実の会話データに基づいて、語用論的観点から分析し、「なので」と似ている表現（「だから/ですから」「ですので」「なんで」など）、接続助詞の「ので」と比較することにより、「なので」の意味機能を明らかにすることを目的とする。

3. 接続詞の分類について

尾谷 (2015) では、「なので」を接続詞の中間段階として、指示代名詞と共起した「それなので」のような表現と関係している可能性がある」と指摘している。その根拠としては、BCCWJ では 12 例、国会会議録では 53 例がヒットしたことにある。しかし、

2004年から「なので」の使用率が上昇するにつれ、「それなので」は2001年から徐々に減少していくという。「それなので」の用例は例(2)である。

例(2)

自分で思ったようにはいかないものだ。それなので、結局はただわが身を正して振るまい、人を責めないことだ。(尾谷 2015:199[BCCWJより])

また、新明解国語辞典(2012)などの国語辞典には「なので」の意味について、原因・理由と帰結とを結び付けることを表すと記述されているのが一般的であり、「そうであるから」「だから」「それで」などと同じような意味で位置づけられている。

しかし、筆者の収集した用例の中で、次のように原因・理由と帰結の関係がはっきりとしていないものもある。

例(3)

池谷：ところで、森アンナ、ふるさとはどこですか。

森：私は生まれてから、ずっと東京です。

池谷：地方に住んでみたいなことが|あります|？ [|発話の重なり]

森：|そうですね|なので、一種の憧れみたいなものがあります。

こう、故郷みたいのがあると羨ましいと思います。

(「マネーのまなび」BSテレ東, 4/22 放送)

上掲の用例において、森は生まれも育ちも大都会の東京ということから、いつか地方に住んでみたいと思っている意味を表そうとしている。そこで、「なので」は直前の相手の発話を超えて、先行文脈にある自分の発話「ずっと東京に暮らしていること」と、相手からの質問「東京と違った地方に住むこと」とを結び付けてそれに対する見解を示していると考えられる。

例(3)の「なので」は、市川(1978:93)で示された接続詞の「連鎖型」の分類と関係している。「連鎖型」は前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べるものである。そして、その下位分類としての「連係」(解説付加、見解付加、前置きの表現との連係、場面構成など)に位置づけられると考えられる。例(4)はそれである。

例 (4)

- a. 初めて朝顔の花が咲いた. 白い大きな花だ. (連係-解説付加)
b. 初めて朝顔の花が咲いた. (ソレハ) 白い大きな花だ. (市川 1978:138)

前述のように、国語辞典では、「なので」の意味について、原因・理由と帰結とを結び付けることを表す「そうであるから」「だから」「それで」などと同じような意味に位置づけられているが、「だから」/「ですから」、「それで」のような接続詞は、全文の内容を条件とするその帰結を、後文に述べる「順接型」の分類(市川 1978)とされている。水落(2020:6)では、文中に「なので」を用いると筋道を立てて説明する必要があり、文章が長くなり、畏まった感じになるが、文頭に使うことによって「だから」に近い断定の印象が強くなり、要するに若者が曖昧さと距離の近さを求めて文頭の「なので」を好んで使用しているという見解を示している。確かに文頭の「なので」は「ですので」よりくだけた感じになり、「だから」(ですから)より客観的な原因・理由を表す機能を有している。また、文頭の「なので」は接続詞の「だから」「それで」などと置き換えられることから、上述の「順接型」に分類されることができる。

しかし一方で、日常会話においては、全文の内容を条件とするその帰結を後文に述べるような因果関係が深い「順接型」とは考えにくいものもある。例えば、次の例(5)はそれである。

例 (5)

山本 : 実は駅から看板が見えるんですね。えー、創業半世紀を超える老舗の中華料理屋さんです。一番人気は、メニューの中はやっぱりこの絶品スープのタンメン

マツコ : この天津ラーメンが気になるわね。

山本 : この調理法は本当に究極名野菜ジュースを作っているということです。まずは、にんじんをうすくスライスにすることでうまみがスープに溶け出しやすくなります。で、キャベツなんですけれども、葉っぱの部分はもちろん使うんですが、葱の部分も使って、それも葱をですね、こまかく刻んでいきますね。みじん切り

マツコ : 結構手間をかけてるんですね。

山本 : そうです。なので、その栄養分だとか、野菜の甘みがスープに溶け出しやすくなっている。で、またもう一つ、野菜ジュースにする調理法があります。

(「マツコの知らない世界」TBS, 8/3 放送)

上掲の例(5)の「なので」は先行文脈のどこと結び付くのかを実に判断しにくい。敢えて言えば、先行の山本の説明している調理法に対して、自分の見解を「なので」によって一括りにして提示していると言える。

また、次の例(6) [下線部]についても同様に考えられる。

例(6) [マッサージの後]

高橋 : どうでしたか。

モデル : もっちりしてます。

高橋 : お肌がなんか、点で、こう、ほぐすことによって、あとはこう、血行がちょっとよくなるんですね。なので、押すだけで全然大丈夫なので、お風呂上がり、お腹もやっぱりケアしていただくと、全身の回りもよくなるので、ぜひ試してみてください。

モデル : はい。

(「BeauTV～VOCE」テレビ朝日、8/6 放送)

4. 文頭の「なので」と類似表現の使い分け

接続助詞として位置づけられる文中の「ので」と「から」は原因・理由を表す点において共通しているが、前者は客観的判断を根拠とする文脈に用いられるのに対し、後者は主観的判断を根拠とする文脈に用いられる傾向がある。一方、接続詞は文単位を超えて、複数文のまとまり関係を示す役割を持っている。接続詞によって、話者の思考の展開方向もうかがえる。文頭では、丁寧な意を表す丁寧体を用いると、「ですので」と「ですから」の形になる。逆に、くだけた形では「なので」「なんで」と「だから」の使い分けがある。

「なので」の「な」は口語助動詞「だ」の連体形である。文末の場合、連体形「な」の付いた「のだ」は、例えば、「それはこういうことなのだ」のように、相手の未知のことを解説、教示し、また強く決意を表明するときに使われる(『広辞苑』第五版)。この文末の「なのだ」が文頭に来ると、「なので」になると考えられる。しかし、筆者の収集した上述の例(1)、(3)のように、「です/ます」の丁寧体を基本調としている会話なら「ですので」を用いればいいのに、日常会話では丁寧体の「ですので」よりくだけた形の「なので」の方が口頭表現としてよく用いられる傾向がある。同様に丁寧体を基本調としている会話でも、例(7)のような文頭に来る「だから」が用いられることがある。

接続詞として用いられる「なので」の意味機能への再考察
—語用論的観点に基づいて—

例 (7) [面接者は日本語母語話者]

面接者： あー、じゃ家の近くも、こんな都会の真ん中ですか？

学習者： はい

面接者： そうですか。

じゃ、逆に田舎に行く方が、ちょっと落ち着かないですかね。

学習者： あー、おうちでも私、人と、あー、交流したい

面接者： あー、そうですか。だからやっぱり、上海の方がいいですね。あー、
そうですか。わかりました。ありがとうございました。

(I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパスより)

1.1で述べたように、最近の若者には、優しい志向でコミュニケーションを重視し、主張や対立を回避する心理的な側面から表現を曖昧にする傾向がある。そこで、文頭で丁寧体の「ですので」を用いると、相手との距離を置くことになり、畏まった感じになるため、文頭の「なので」が若年層で選択されやすくなると考えられる。

一方、例 (8) のような主観的原因・理由を表す場合、文頭の「なので」を用いると逆に押しつけがましい印象を与えかねないため、注意しなければならない。

例 (8) [経理担当の女性社員]「そろそろ月末です。なので、精算お願いします」
(梶原「しゃべりテク」)

上掲の発話では「そろそろ月末ですから、精算お願いします」に言い換えると、押しつけがましさが、緩和されるという。社内での上下関係の立場もあるが、経理担当の社員が相手社員への要請に対して、「月末になる」という根拠を自分のお願いの理由として提示する方が、落ち着きが良くなるのである。それに対し、文頭の「なので」の場合、「そろそろ月末です」を一般事実として断定し提示した上、「なので」により自分の要請を正当化するというのは、相手に常識とされる一般的事象を知らないというニュアンスを感じさせることから、かえって失礼になると考えられる。

例 (8) は文頭の「なので」の使用問題というより、会話状況や相手による話した方に問題があると言えよう。

その他、例 (9) は前文の「ので」の後、少し間を置いてから、「なので」を用いた会話例もある。

例 (9)

先生： 営業で最近 Zoom 上で仕事の、対面でお仕事の、対面でお仕事をするその時に肌をツヤとして見せると、それもまた印象が違うんですね。

それで、おススメなのがリキッドタイプのファンデーションになります。パウダータイプで塗っていただくより、ツヤ感のお肌が出てきますので、ファンデーションを塗る練習をちょっとしてみたいと思います。

ナレーション： 30 代以上のビジネスマンにおススメなのは、ツヤ感が出て、リモード映えをするリキッドタイプのファンデーション。

先生： で、塗りやすいように、指の腹でこうやって確かめます。一気に、ぽんって指にこう載せちゃうと、載せたヤツがいっぱいついちゃうので (0.1 秒) なので、指の腹でなじませてから頬に塗っていきましょう。

(「まだアプデしてないの？」テレビ朝日 7/17 放送)

また、筆者の収集した会話例の中で、「なので」と同じような機能と考えられるところで 60 代の男性が自分の見解を述べる際に「ですから」を用いた。

例 (10) [年代別「理想の老後の住まい」の紹介の後]

アナウンサー(女)： その理由もありまして、階段の上り下りは大変。そして、コンパクトな間取りのほうが家事や掃除が楽といった理由があります。

アナウンサー(男)： 林さんから見てこのデータはどうですか。ちょうど真逆な感じですけども

林： そうですね。まず階段の上り下りは私も非常に痛感しておりますね。買い物が済んだその時、2人で両手でいっぱいなんです。それで、2階まで上がるって大変な作業なので (あ～) ですから、1階の冷蔵庫に取り敢えず置いとこうとか

アナウンサー(男)： なるほど

林： 2階まで持ってくるのは大変というのが、まずすごく痛感するんですけども

(「ウラマヨ！」カンテレ, 7/17 放送)

接続詞として用いられる「なので」の意味機能への再考察
 - 語用論的観点に基づいて -

文頭の「なので」は「ですので」のくだけた形の表現と考えられるが、「なので」より更にくだけた形の口頭表現として「なんで」が用いられることもある。例(11)はそれである。

例(11)

- 赤萩：この記事を仕上げるのに5年かかったそうです。すごい拘っています。
 マツコ：そのあと、また具材を載せて焼くの？
 赤萩：それで具材を載っけて冷凍チルド
 マツコ：別々なんだ。生地だけを焼いて
 赤萩：焼いて
 マツコ：具材を載せて(はい)それで冷凍しちゃうの？
 赤萩：そういう感じですね。なんで、最初は焼くことによって[ピザの生地]立ち上がりやすいんです。

(「マツコの知らない世界」TBS, 6/29 放送)

しかし、文頭の「なので」の用例と比べて、文中の「なんで」の用例があったものの、文頭の「なんで」の用例は少なく、「なので」に代替される傾向が見られる。その理由として、文頭の「なんで」は疑問詞の「なんで?」(「どうして?」の口頭表現)と同じ表現形式になり、疑問の上昇調を強調しないと、実に紛らわしいことが考えられる。

5. 文頭の「なので」の使用について

文頭の「なので」の使用頻度の急上昇について、これまでの多くの先行研究では、「2011年に小学4年生の学習発表会で多く使用されていたのに驚いた」(尾谷2015)、「使用する者はこの『なので』によって丁寧さを付加できると認識している場合が多いため、『誤用』と考えて使用に躊躇することは少ないだろう。」(水落2020:12)などのように文頭の「なので」の使用を比較的否定的に評価していることが多い。

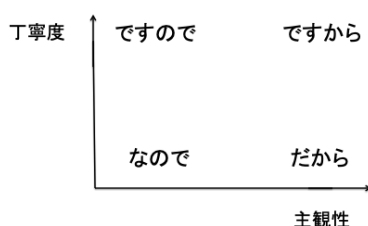
また、尾谷・二枝(2011:267)では、「なので」は親疎の境界線が曖昧な間柄(サークルの先輩など)で相手と一定の距離を保つと同時に、仲間のような親近感を表すというところに創発したと指摘している。表で示すと、次のようになる。

表1 「なので」の創発について

	丁寧 ←————→ 非丁寧	
カラ系	ですから	だから
ノデ系	ですので →	← なので

しかし、筆者は両者が単なる丁寧さの問題のみではないと考えている。丁寧度と主観性から見ると、文頭の「なので」の使用は次のようになる。

表2 丁寧度と主観性に見る文頭の「なので」



文頭の「なので」は丁寧体を用いていないため、畏まった感じにはならないが、「だから」と比べ、一般的事象に基づいてより客観的に判断を根拠とする文脈に用いられることから、客観性を保ち、主張を和らげる効果が生じると見られる。

6. まとめと今後の課題

近年、文頭の「なので」は会話のみでなく、メール、SNS、文章まで現れることがある（水落 2020:9）。SNS の使用が普及している現代社会の中で、言文一致体（話し言葉を取り入れた書き言葉の文体）を目にすることが多くなる。その影響からメールや文章にも口頭表現として用いられるはずの文頭の「なので」が現れてくるのも不思議ではないと思われる。しかし、学術的文章やフォーマルな文章では、接続詞の「だから」と同様、改まり度の足りない、口頭表現の使用を避けるべきであり、文章表現として用いられる「それで」「そこで」「従って」「それゆえ」などがより適切になると考えられる。今後、会話データおよび文章データを増やして現代日本語での「なので」の使用実態を更に考察していきたい。

接続詞として用いられる「なので」の意味機能への再考察
—語用論的観点に基づいて—

参考文献

- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 尾谷昌則・二枝美津子 (2011) 『構文ネットワークと文法— 認知文法のアプローチ』 研究社
- 尾谷昌則 (2015) 「接続詞『なので』の成立について」 『日本語語用論フォーラム』 ひつじ書房, pp.183-208
- 永野 賢 (1959) 『学校文法文章論』 朝倉書店
- 野田尚史 他著 (2002) 『複文と談話』 岩波書店
- 許 夏玲 (2014) 「日本語会話における曖昧表現の使用目的と効果」 第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集, ココ出版, pp.445-454
- 水落いづみ (2020) 「文頭に用いられる『なので』の機能と受容—『なので、書いてみました。』—」 『日本語教育センター紀要』 第16号, pp.1-14
- 米川明彦 (1996) 『現代若者ことば考』 丸善ライブラリー
- 矢澤真人 (2004) 「なので」 『問題な日本語—どこがおかしい? 何がおかしい?』 大修館, pp.44-46

参考資料

- 『広辞苑』 (第五版) (1998,2005) 岩波書店
- 『新明解国語辞典』 (第七版) (2012) 三省堂
- 「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」 国立国語研究所
- 「最近気になる放送用語—文頭の『なので』?」 (塩田雄大)
- <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/term/117.html> , 2021.7.19 閲覧
- 「文頭『なので』に違和感 接続詞で話し始める人たち」 (梶原しげるの「しゃべりテク」)
- <https://style.nikkei.com/article/DGXZZO15521930Q7A420C1000000/>, 2021.8.30 閲覧